

## 向社会的行動における「自己」の機能

高 木 修

The self in prosocial behavior

Osamu TAKAGI

### Abstract

Nakamura(1983;1988;1990) postulated that a series of phenomenal self-process is composed of the following four kinds of element arranged in a specific order. The first stage of the self-process is "Awareness of Self" to focus on self, the second is "Understanding of Self" stage to get self-concept, that is, knowing what kind of person I am by means of self-perception and social feedback, the third is "Evaluation of Self" stage to evaluate many different qualities and activities of the self in terms of many different standards, and the last is "Presentation of Self" stage to behave in order to please the audience and to construct(create, maintain, and modify) one's public self congruent to one's ideal.

This article is aimed to examine the causal relationship between self and prosocial behavior on each stage of self-process and to investigate the possibility of developing the research on prosocial behavior from the viewpoint of self.

Key words: prosocial behavior, self, self process, self-focus, objective self-awareness, self-concept, self-esteem, self-presentation, self-disclosure

### 抄 録

中村(1983, 1988, 1990)は、自己過程に4つの位相, すなわち、自己に注意の焦点を当てる「自己の姿への注目」の段階、注目された自己の姿の特徴を自分なりに描き出して自己を概念化する「自己の姿の把握」の段階、把握された自己の姿を評価する「自己の姿への評価」の段階、そして、自己の注目、把握、評価で活性化された自己を、他者との相互作用の中で他者に向けて表出する「自己の姿の表出」の段階の4つが存在するとしている。

この論文では、「自己」、特に自己過程に注目し、その各位相において、向社会的行動と自己とがいかなる因果的関係を持っているかを検討し、「自己」の視点から、従来の向社会的行動の研究の整理と、その方向からの今後の研究の発展の可能性が考察された。

キーワード: 向社会的行動, 自己, 自己過程, 自己焦点化, 客体的自覚状態, 自己概念, 自尊心(自尊感情), 自己呈示, 自己開示

## 1. はじめに：心理的過程としての「自己」

近年、社会心理学の領域において、「自己」(self)に関係する研究が増えてきた。これは、社会的行動を理解しようとする時、その背景となっている「自己」の機能に触れなければならないことが多いからである。

ところで、「自己」という概念は、従来から、持続性のある安定した全体的な構造としての自己を指すために、あるいは自己の諸側面が全体として構造化していく心理的・社会的過程としての自己を示すために用いられてきた(例えば、Gergen, 1971)。しかし、この論文では、「構造か過程か」という問題はさておくとして、「自己」の問題を、前者のように、固定的な容体としてできあがった構造(structure)からではなく、後者のように、社会的な文脈の中で構造化していく現象的な過程(phenomenal process)から捉えることにする。したがって、ここでは、自己を「自己過程」(self process)として捉えることになる。

## 2. 現象的な「自己過程」：4つの位相

我々は、例えば、自分に注意を向け、自分がどのような特徴を持っているかを把握し、把握した自己の姿を種々の基準に従って自己の理想や他者と比較して評価し、それに満足、あるいは不満足を感じ、また、種々の行動を通じて自己を他者に提示して、自己の評価を高めようとする。このような一連の自己過程の現象は、自己の意識的、評価的過程として心理的であるだけでなく、明らかに、他者に働きかけ、他者からの反応を受ける過程として社会的でもある。

以上の日常的な例から、また、Duval & Wicklund (1972) の「客体的自覚状態」(objective self-awareness) 説からも分かるように、「自己過程」は、特定の順序で配列されているところの、いくつかの要素から構成されていると考えることができる。すなわち、我々は、そこにいくつかの位相を認めることが出来る。

中村(1983, 1988, 1990)は、自己を現象的な過程として捉えた場合、そこには4つの位相を見いだすことが出来るとし、次のようにその内容を説明している。まず、第1は、「自己の姿への注目」段階であり、自分の外観や心理的状态とか、さらには他者との社会的関係などに注目し、それらに注意の焦点(focus of attention)を置くことから自己の心理的、社会的問題が始まるとしている。第2は、「自己の姿の把握」段階であり、注目された自己の姿の特徴を自分なりに描き出して、自分はこんな人間であるとの自己の概念化が起こるとしている。それによって、「自己像」(self-image)とか「自己概念」(self-concept)と呼ばれるものが明瞭になってくるといふ。第3は、「自己の姿への評価」段階であり、把握された自己の姿を種々の基準から社会的に評価し、自分自身としてそれにどの程度満足するかということが問題になるとする。なお、自己の現状に満足し、自信を持つ程度を「自尊心(自尊感情)」(self-esteem)と呼ぶ。そして、最後の第4段階は、「自己の姿の表出」段階であり、前段階までで認知的に、また情動的に活性化さ

れた自己が、他者との社会的相互作用の過程で他者に向けて表出されるとしている。この表出には、2つの側面、すなわち、「自己開示」(self-disclosure)と「自己呈示」(self-presentation)とがあり、前者は、“自分についての情報を言語的に他者に伝えること”(Cozby, 1973)を、後者は、他者が私に対して抱く印象の操作、あるいは管理(impression-management)を意図した開示を意味している。ところで、この位相の順序は、実証的データによって裏づけられてはいないが、現象の生起の自然の順序に基づくとすれば、このようになると仮定されている。

### 3. 向社会的行動における「自己」の機能

この論文の目的は、向社会的行動と「自己」との因果関係を考察することであり、ここでは、「自己過程」の4位相別にそれを行うことにする。

#### 1) 「自己の姿への注目」の位相における自己と向社会的行動

##### (1) 客体的自覚状態：自己焦点化(self-focus)

Duval & Wicklund (1972) の「客体的自覚状態」説では、自らの注意の焦点を自分の姿や状態の上に置くと(客体的自覚状態)、そこでの自分の姿や状態が望ましい基準(corrective standard)との比較で評価され(self-evaluation)、基準を満たしていない自分に対しての負の感情(negative feeling)が抱かれ、その不快感の低減、あるいは解消のために自己改善の動機づけが高まるとされている。この説に従えば、鏡やカメラや録音機や自己のシンボルのような自己に焦点を当てさせる刺激によって人を客体的自覚状態にすると、その人は、現在の自己と理想の自己との間の食い違いに非常に関心を持つようになる。そして、その時、その場で、顕現的になっている基準に従って自己を評価しようとする。もし、向社会的な基準が顕現的となり、困っている人を助けることが何よりも大切であると考えられ、しかも自分があまり向社会的でない自己評価しているならば、その人は、機会があれば援助行動に従事して、自己の評価を高めようとする予想される。この自己焦点化と援助との関係は、いくつかの援助研究によって示唆されている。例えば、自分の反応を誰かに気づかれていることを知っている傍観者は、そうでない傍観者よりも、暴力的な泥棒の被害者を一層援助した(Schwartz & Gottlieb, 1976)。

Latané & Darley (1968) は、潜在的な援助者の存在が援助の欠如の原因になるという「傍観者効果」(bystander effect)、特に「責任の分散」(diffusion of responsibility)の効果を発見したが、Wegner & Schaefer (1978) は、この効果を自己に焦点を当てる注意の観点から説明しようとした。すなわち、援助の必要な状況において潜在的援助者が自己に焦点を当てて経験する注意の水準は、傍観者の数の増加にともなって低下する。一人、あるいは少数の犠牲者の周りに多数の傍観者がいるような状況では、犠牲者が注意の焦点に、そして傍観者が聴衆になる。傍観者は、犠牲者を見てばかりいて、自分に注意を向けることがない。そのために、犠牲者は、苦痛に満ちた自己を感知するが、傍観者の方は、自己に焦点を当てることが出来ずに、援助の提供に失敗するだろう。これとは逆に、犠牲者の方が多くいて、潜在的援助者がむしろ少数の状況で

は、注意の焦点は潜在的援助者にあり、犠牲者が聴衆になっている。そのために、潜在的援助者は、なんとか努力して援助しようとするだろう、と仮説された。実験では、潜在的援助者の数（自分一人、あるいは、3人のうちの一人）と被援助者の数（一人、あるいは、3人）とを組み合わせ、4つの条件群が作られ、無作為に各群に12名の男女学部生が割り当てられた。自己焦点化を増し、向社会的な基準が顕現化された環境の中で、被験者は、眼帯をつけ、サングラスをかけて、お金を稼ぐために編集作業をするように求められた。作業が完了した後に、被験者は、仲間の被験者が、もっと厳しい状況（活字が非常に小さい）のために、課題を完了できずに、お金の支払いを受けられないでいると告げられた。そして、自分の編集作業の成果のどの程度を、お金をもらえずにいる人に寄付してあげるかが尋ねられた。その結果、援助は、被援助者が多い時ほど、また、潜在的援助者が少ない時ほど、促進され、仮説が支持されたのである。

自己焦点化と援助との関係は、「自己呈示」の観点から解釈することもできる。すなわち、他者が自分の行動に気づいていることを知っていると、他者承認基準が顕現的になる。そのために、人は、他者に良く見られるように努めて、援助行動を行おうとするかもしれない (Reis & Gruzen, 1976)。このように自己を呈示するために援助することは、確かに予想される。しかし人は、他者ではなくて、自分自身に対して自分を良く見せるために、つまり、他者の承認を期待することなく、援助行動を採ることが出来るだろうか。

Duval, Duval & Neely (1979) は、この疑問に対して、「出来る」と答えている。彼らは、被験者の注意を、他者の感知なしに、つまり他者承認欲求の助けなしに、被験者自身に向けた。被験者となった55名の女子学部生は、性病の蔓延についてのビデオを見ている時に、ビデオのモニターで自分の映像を見せられることによって、自覚状態にさせられた。すなわち、無作為に5群に分けられた被験者は、性病についてのビデオを見る直前、直後、4分前、4分後の何れかにおいて、自分の像をビデオで見せられた。ビデオを全て見終えた後で、各群の被験者は、無関心な一市民として、性病の蔓延にどの程度責任があると思うか、また、時間とお金を寄付することによって、性病蔓延の防止運動にどの程度協力しようと思うかを尋ねられた。その結果、直前、あるいは直後に自覚状態にさせられた群の被験者は、4分前や4分後にそうされた群の被験者よりも、一層責任を感じ、一層協力的であった。自己像をビデオで見せられなかった統制群の被験者は、4分前や4分後の群の被験者と類似した反応を示した。この実験は、他者への援助の必要性に気づくことに近接した自覚状態が、援助行動を促進することを明らかにしている。

ところで、自己焦点化と援助との関係は、種々の原因で切れてしまったり、変化したりすることがある。我々は、自分自身と援助の必要な他者とに同時に焦点を当てることが出来ない。したがって、大きな私的心配事があったり (Gibbons & Wicklund, 1982)、失敗で自分が深く傷ついていた (山口, 1988) して、自己に過剰な注意が集中していると、そもそも他者の欲求に気づきにくく、援助に失敗するだけでなく、そのような人をその上に自覚状態にすると、極端な自己関心が喚起されて、それによって自分のことしか考えない低い水準の個人的基準が顕現化され、

高い水準の向社会的基準が顕現化されないために、援助行動が起こりにくくなることもある。

以上のように、自己に焦点を当てて自覚状態にすることと援助との結びつきは、結局のところ、人が自己の姿を望ましい基準に照らして評価し、自己反省するだけ十分に強く客体的自覚状態にさせられているかということと、そこではどの水準の自己評価基準が顕現化されているかということとによって規定されると考えられる。

(2) 焦点化の標的：内面的自己か外面的自己か

Buss (1980) は、自己に2種類の自己が、すなわち、意図的に表出しない限り他者の目に曝されることのない自己の内面の姿である「内面的自己」(private self) と、社会的対象として他者の目に曝されている自己の外面の姿である「外面的自己」(public self) とがあり、どちらの自己に焦点を当てて自己を自覚するかによって、その心理過程は異なるとしている。

自己の内面に注意の焦点を当てることによる内面的自覚状態 (private self-awareness) では、その時の自己の内的状態の特徴、すなわち、感情、動機、価値観、意見、あるいは性格などが明確に自覚され、それらが一層強められることになる。したがって、例えば、援助規範が内面化されていて、その意識が自己焦点化によって高められるならば、援助は促進されるだろう。しかし、規範の内面化が十分でなく、援助するために負担しなければならないことや援助を求めている人に対する悪感情が強調されると、逆に、援助は抑制されるだろう。このように、自覚状態にされたときの自己の内的状態次第で、援助に及ぼす自己焦点化の効果は異なると予想される。

他方、自己の外面に注意の焦点を当てることによる外面的自覚状態 (public self-awareness) には、2種類のものがあるとしている (Buss, 1980)。一つは、他者の注視の対象となっている自己（見られている自己）の外面に自らも注目している状態であり、もう一つは、自己の外面について他者からもたらされる情報に自ら注目している状態である。前者の場合、人は、他者の評価を懸念し、失敗の恐れのある行動に従事することを差し控えるだろう。一般に援助状況は、不明瞭で、不慣れなものであるから、この状態では援助行動が抑制される傾向にあると予想される。他方、後者の場合、他者からフィードバックされた自己についての情報は、自らが自己について持っているものと比較される。もし両者に食い違いがあり、還元情報の方が高く評価できるものならば、自尊心が高揚し、それに伴うよい気分や好感情や有能感などは、援助行動を促進するだろう。しかし、逆の時には、自尊心が低下し、それに伴う悪い気分や悪感情や無能感などは、援助行動を抑制するだろう。なお、援助行動に従事することによって、低下した自尊心を高めることが出来ると予想されるときには、その援助行動は促進されると予想することも出来る。ところで、両者に食い違いがない場合、一般に自尊心は維持されるが、そのような時でも、自尊心を高めることが出来ると予想される援助行動は、促進されると予想出来る。このように、自覚状態にされたときの援助状況の特徴とフィードバックされた情報次第で、援助に及ぼす自己焦点化の効果は異なると予想される。

## 2) 「自己の姿の把握」の位相における自己と向社会的行動

### (1) 共感：自己の拡張 (extension of self)

共感 (empathy) とは、他者の苦しみ (あるいは、好運) を観察した時に、自分にも苦悩 (あるいは、意気揚々) の感じが起こることである (Stotland, 1969)。Wegner (1980) は、この情緒的反応が、自分自身の直接経験からではなく、むしろ他者の経験の観察から起こっているゆえに、それらの反応は、自己概念ないし自己像の一部として他者の姿を取り込むこと、つまり、「自己 (概念) の拡張」を想像させるとしている。そして、この情緒の共有が、恩恵、親切、および向社会的行動を共有することになると仮説されてきた (例えば、Hoffman, 1976)。

我々が他者の苦境を共有する、つまり、共感する仕方には2つのタイプがある。一つは、ある人の情緒の表出を直接に知覚して、共感的にそれに反応してしまうものであり、もう一つは、ある人に情緒を喚起させている状況を認め、その人に与えている状況の影響を理解して、共感的にそれに反応するものである。

前者の、他者が表出する情緒を知覚して直接的にそれに反応する、例えば、他者が泣いているときに自分も泣くことは、一つの型の模倣であり、新生児においてさえも認めることのできるものである。したがって、他者の行動に対して、自分が持っているそれに似た行動で反応することは、生物学的に遺伝されているようであるが、これは、自分と他者との混同に一部分原因しているとも指摘されている (Hoffman, 1976)。Piaget (1963) は、幼児が何度も同じ反応を繰り返すことを「一次的循環反応」 (primary circular reaction) と呼んでいるが、Simner (1971) は、他の幼児が泣いているときに、ある幼児がそれに調子を合わせて自分も泣くという傾向が、この過程における単純な間違いに起因するとしている。すなわち、幼児は、他の幼児の泣き声を自分のそれと間違えて、繰り返すように、自分も泣き出すというのである。このように、初期の共感とは、他者の情緒的表出を、自分自身のそれと間違えて受け取ることに由来するようである。したがって、このタイプの共感とは、他者に関心を持つことに帰着しないだろう。共感された苦悩が他者の救済を目的とした行動に変換されるのは、自分と他者との違いを理解できるようになってからである (Hoffman, 1976)。人生の初期には、未発達な自己の拡張として、共感的な情緒は起こるが、それだけでは、向社会的行動を引き起こすのに十分でないのである。

他方、後者のようなタイプの共感とは、子供が発達するにつれて可能となる。それは、自分と他者は違う、彼らは自分と違う考えを持っている、彼らは自分と違う情緒状態を経験する、などといったことを、発達するにつれて彼らが理解できるようになるからである。このことは、「役割取得能力」 (role-taking ability)、つまり、他者の視点から状況を理解する能力の観点から説明できる。すなわち、苦しんでいる人の視点から状況を見ると、その人が表出する情緒の性質が明確になり、彼の苦しみを低減、解消するには、その状況をいかに変えればいいかが明らかとなる。したがって、そのような理解力を開発している人は、他者の苦しみにによって共感的に喚起されて、他者の慰安を動機づけられるのである。

共感と向社会的行動との関係は、それほど強いものでないことが研究から明らかにされている。未発達な幼児の共感的情緒の萌芽から、自己を他者にまで拡張できてそれによって他者の運命に気を配るようになるまでの発達が十分に進展しなかったり、たとえしかるべく発達しても、妨害的な情緒的出来事によって、共感性を働かせることができないこともよくある。このような理由から、共感は、向社会的行動の重要な規定因になり難いようである。

## (2) 自己知覚 (self-perception)

我々は、時に、自分の行動について疑問を持つことがある。例えば、どのような目標に動機づけられてそんな行動をしたのか。そんなことをする自分とはいったいどんな人間なのだろうか。我々は、そのような時、自分の行動を理解するために、自分にある特性を帰属する。これが、「自己知覚」の過程である。

「自己知覚」の過程は、向社会的行動の生起に寄与する。例えば、ある人が、自分にはなんらの利益もない、しかし他者には積極的な効果がある行動を行っているならば、その人は、将来も同じような行動を行い易いだろう。それは、その人が自分を援助的であると自己知覚するだろうからである。すなわち、ひとたび人が、自分を愛他的であると知覚したならば、思いやりのある行動を、その後もとり易いだろう。なぜならば、人は、自己知覚を通じて得た「自己像」ないし「自己概念」（“自分は、愛他的な人間である”）と一致した行動をとりたいと願うからである。

向社会的行動が自己知覚を通じて引き起こされることを最初に示唆したのは、Freedman & Fraser (1966) である。彼らの実験では、主婦が無作為に3つの条件群に割り当てられた。第1群の主婦は、「カリフォルニア消費者団体」の代表者と名乗る実験者から電話を受け、手持ちの家庭用品の調査のために5、6人の男性職員がその主婦の家庭を訪問することに同意してほしいと要請された。この1回の要請に対しては、22%の主婦が同意しただけであった。第2群の主婦は、家庭訪問の要請の3日前に、同じ実験者から電話を受け、比較的要求度の小さい恩恵（8つ簡単な質問に回答すること）を求められ、それに応諾していた。彼女たちの場合、53%が調査員の訪問に同意した。さて、第3群の主婦も、同様に3日前に電話を受けたが、その時は、ただ単に団体の名称と目的だけが告げられた。彼女たちの場合は、28%だけが同意した。なお、この低い応諾率は、2回の電話で実験者と主婦が親しくなったために、第2群の高い応諾率が得られたのではないかという疑いを否定している。

以上の結果は、最初の小さな要請に応諾した人が、後の一層大きな要請にも応え易いこと（踏み込み効果、foot-in-the-door effect）を示唆している。これは、小さな要請に応諾した結果、その人が自己理解を変化したからである。すなわち、その人は、自分が他者の要請に応えることのできる愛他的な人間であると自己知覚し、その後大きな要請がなされたとき、この新しい自己像と一致して、愛他的に行動した、つまり、大きな要請に応諾したのである。

ところで、人が最初の要請への応諾の理由を、例えば、報酬や脅威に帰属したならば、その人は、後の要請に応諾しなくなるだろう。なぜならば、それらの理由だけで行動が正当化されて、

援助性の自己帰属を必要としないからである。他者の課題遂行を援助して報酬を受け取った人は、受け取らなかった人ほど、自分を援助的であると考えなかった (Batson et al., 1978)。なお、最初の要請に応えなかった人が、その理由を報酬や脅威に帰属できないと、その人は、自分を非援助的であると自己知覚し、そのために、後の要請への応諾を避けようとする (Snyder & Cunningham, 1975)。

### (3) 社会的フィードバック (social feedback)

我々だけでなく、他者も、我々の行動に当惑して、その行動を理解するために、我々にある特性を帰属する。そして、彼らは、自分が我々をどんな人間であると思っているかを我々に告げてくれる。これが「社会的フィードバック」であり、我々は、それによって、自分の特性を発見することがある。この他者とのコミュニケーションには、他者が自己にラベルを貼る (self-label) 直接的な場合と、自己情報を我々に提供して、特性の推論を我々に委ねる間接的な場合とがある。直接的であれ、間接的であれ、我々が受け取る社会的フィードバックは、自己を知り、自己を理解するための重要な情報源であり、それによって、我々の将来の行動は大きく影響を受ける。

「社会的フィードバック」の過程もまた、向社会的行動の生起に寄与する。前例のように、ある人が、自分にはなんらの利益もない、しかし他者には積極的な効果がある行動を行っているならば、その人は、将来も同じような行動を行い易いだろう。それは、他者が、その人に、あなたは援助的であると告げるだろうからである。すなわち、ひとたび人が、あなたは愛他的であると他者から告げられたならば、思いやりのある行動を、その後もとり易いだろう。なぜならば、人は、社会的フィードバックによって確立した「自己像」ないし「自己概念」(“自分は、愛他的な人間である”)と一致した行動をとりたいと願うからである。

直接的な社会的フィードバックが向社会的行動を促進することは、いくらかの研究で証明されている。例えば、5年生の児童たちは、彼らの校長、教師、あるいは学校管理者から、君たちは身なりがきちんとしていて、小綺麗で「ある」といわれると、きちんとしていて、小綺麗で「あるべきだ」といわれた児童たちほど、辺りを散らかすことが少なく、よく掃除をした (Miller et al., 1975)。

他者が我々に貼るラベルは、時に、我々にとって不愉快なものである。それにもかかわらず、我々は、それを受け入れ、自己理解にそれをいつも使うようになり、それに影響されるようになるのはなぜか。その理由は、自己呈示の観点から説明することができる。我々は、他者に自己を呈示する際、ある人(々)が与えてくれたラベルを参考にするのがよいことをよく知っている。したがって、我々は、その人(たち)のいるところだけでなく、他の人の前でも、ラベルと一致した行動をとる。その結果、ラベルを確証するような社会的フィードバックを得ることになる。このようにして、ラベルは益々安定したものになっていくのである。ラベルが安定化する過程は、この他に2つある。一つは、社会的フィードバックが、自己についての情報の処理にバイアスをかけることによる。ラベルは、通常、非常に一般的に、抽象的なものである。したがって、ラベ



ルを貼られた人が、そのラベルと一貫する事実を、自己についての情報や記憶の中からバイアスのかかった仕方を探し出すことは比較的容易である。その結果、強力にそのラベルを採用することになる。もう一つは、ラベルを貼った人が、そのラベルに基づいて、我々に対して、繰り返して行動してくることによる。例えば、周りの人たちが、あなたを思いやりのある人だと信じているならば、彼らは、しばしばあなたに援助を求め、それによって、援助している自分の姿を観察する機会を頻繁にあなたに与える（Snyder & Swann, 1978）。

以上のような過程にもかかわらず、社会的フィードバックは、しばしば拒絶される。我々が、自分自身について非常にはっきりした考えを持っているとき、それと矛盾する社会的フィードバックは、受け入れを拒絶される。したがって、社会的フィードバックが有効なのは、我々が、自分たちの特性について漠然とした考えを持っているときだけであろう。

### 3) 「自己の姿の評価」の位相における自己と向社会的行動

以前の位相で注目され把握された自己の姿、すなわち、「自己像」や「自己概念」は、種々の基準に従って評価され、その結果として自尊感情（自尊心）が経験される。このように行動の結果、自己評価や自尊感情が変化するだけでなく、新たなそれらが、後の行動に影響を与えるのである。そこで、まず、我々が、どのような基準で自己の姿を評価するのか、また、その基準はどのように顕現化されるのか、そして引き続いて、その評価が、どのように向社会的行動に影響を与えるのかを検討する。

#### (1) 潜在的な評価基準

Wegner (1980) は、種々の研究に基づく基準（French & Raven, 1959；Kelman, 1961；Loevinger, 1966；Wegner, 1975；Kohlberg, 1976；Haan, 1977 など）を整理して、我々が、自己の特徴や行動を次の基準に従って評価するとしている。これらの基準は、向社会的行動の根拠をなす「道徳的」自己評価を検討するときにも役立つだろう。

人は、一般に、次のような場合に、自己を一層肯定的に評価するだろう。

- ①苦痛基準：自己が、身体的苦痛、罰、損失、不快な経験の回避に成功するとき
- ②快楽基準：自己が、喜び、報酬、物質的欲求の満足、楽しい経験の獲得に成功するとき
- ③承認基準：自己が、他者に好かれ、承認され、集団加入を認められるとき
- ④規範基準：自己が、他の人々、あるいは、規則、慣習、法律のような標準的、典型的行動の象徴に匹敵するとき

- ⑤公正基準：自己が、他者と公正で、調和した、そして互恵的な関係にあると考えられるとき

以上の基準は、次のような特徴を持っている。すなわち、この中のどの一つの基準でも、向社会的行動の基礎となり得る。逆に、どの基準でも、向社会的行動を回避するための根拠になり得る。また、基準の順序は、その重要さの順序を示している。つまり、私的利益を追求する個人的基準から、向社会的行動の基盤となる向社会的基準まで、順に配列されている。さらに、基準の順序は、自己についての思考の複雑さの順序をも示している。つまり、自己熟考を必要としない

苦痛基準から、自己と他者を共通の次元で比較できることを必要とする規範基準や、自己と他者の間の資源の均衡を計算できることを必要とする公正基準まで、順に配列されている。

## (2) 基準の顕現化と向社会的行動

我々がある状況に遭遇したとき、5つのうちのどの基準が最も重要で、影響力を持つのだろうか。それは、我々自身の特徴と、状況の特性とによって決まる。すなわち、基準の重要度は、各人がどの程度発達しているかによって異なる。一般に、成長し、道徳的成熟を果たし、また、自己について複雑な思考が可能になるにつれて、我々は、基準の階段を順番に登っていく。すなわち、一層高い基準で自己を評価しようとする。したがって、向社会的行動は生じ易くなると予想できる。また、基準の影響度は、状況の特性によっても異なる。状況のある特性は低い水準の基準しか顕現化しないが、別のある特性は高い水準の基準を顕現的にする。その結果、向社会的行動が生じ易くなると予想できる。

さて、人の特徴と状況の特性とによって顕現化された基準は、次の2つの事実によって向社会的行動を引き起こし易くするだろう。まず第1に、人は、自己知覚の過程で、種々の基準から、自己についての推論を行う。例えば、苦痛の回避や快楽の獲得は、向社会的行動の強力な理由になり得る。したがって、それらの基準が顕現的でない状況で自分が向社会的行動を行った場合、人は、一層高次の向社会的基準に基づいて高い自己評価を得るために自分がその行動を行ったと推論するだろう。この過程で顕現的になった基準は、自己理解が行動に変換する際に役立つのである。例えば、承認基準に基づく高い自己評価を得るために向社会的行動を頻繁に行う自己を知覚した人は、その後、承認基準が向社会的行動によって満たされる状況において、一層積極的に向社会的行動に従事するだろう。

第2に、行動から基準の推論へ、そして、その基準から後の行動へとの以上の循環的影響過程では、一般に、低い個人的基準から高い向社会的基準へと人々が自己を評価する基準を高める。すなわち、我々は、すでに持っている基準で自分の行動が説明できないとき、新しい基準を発見する。それは、発達の順序からすると、一層高次の基準になるだろう。その結果、向社会的行動の基礎となる高い水準の自己評価基準が意識され易くなるため、向社会的行動が、一層生じ易くなるだろうというのである。例えば、苦痛、快楽、承認の基準にすでに敏感な人が、それらのどの基準も顕現的でない状況において、自分が向社会的に行動しているのを発見したとしよう。その人は、自己知覚や社会的フィードバックによって、規範基準が、この状況における高い自己評価の基盤にあったことを知る。その結果、その人は、規範基準を認識するようになり、以後、それに合った行動を計画するようになるだろう。

## (3) 自己評価、自尊心の維持と向上の傾向

中村(1988)は、事前の経験が潜在的援助者の自己評価や自尊心に影響し、自己評価の低下や向上、さらには、自尊心が傷ついたり満たされたりすることで、援助行動が促進されたり、抑制されたりするだろうとし、その際に、自己評価や自尊心を維持、向上しようとする傾向が働い

ていると指摘している。そして、この傾向を中心に据えた「SEM モデル」(Self-Evaluation Maintenance Model) を例に挙げて説明している。

このモデルは、Tesser (1988) によるものであり、人は、自己評価を下げないように、あるいは、むしろ高めるように行動すると仮定する。そして、自己評価の高低には、他者との比較過程 (comparison process) や他者を自己に反映させる過程 (reflection process) が重要な役割を果たしているとしている。したがって、比較や反映の対象となる他者の業績や、その他者と自分との親密さ、さらには、自己評価の主題となっている事象と自己との関与性（自己概念にとってのその事象の重要性）の程度によって、これらの2つの過程は影響されるだろうとしている。Tesser は、SEM モデルと向社会的行動との関連性についてあまり触れていないが、中村は、例えば、“関与度の高い領域では、他者の業績が高いほど、自分の業績も高めようとするし、また、そのことは、自分がその他者と親密であるほど起こり易い。しかし、この傾向は、関与度の低い状況においては弱い、” というモデルの予想を、援助行動、特に、モデルの効果に適用できそうであるとしている。

#### (4) 被援助者における自己評価の機能

自己評価や自尊心は、以上のように、潜在的援助者が援助するかどうかに対してのみならず、潜在的被援助者が援助を要請するか、あるいは援助を受け入れるかどうかにも影響を与えるだろうと考える。

高木 (1989) は、潜在的な被援助者が、援助を要請するかどうかの意思決定を行う過程を検討している (図1 参照)。この過程のモデルによると、問題の存在に気づき、その問題を重要で、

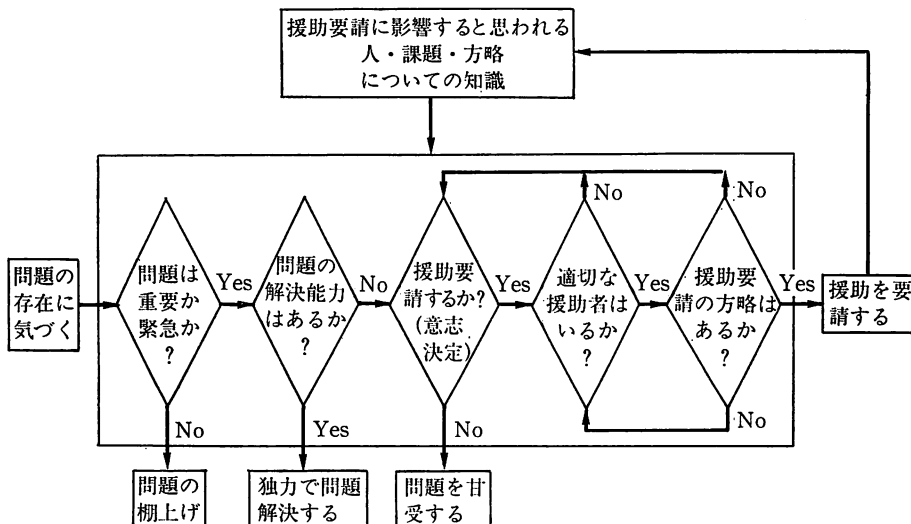


図1 援助要請の生起過程（相川充，1989より一部改変）

緊急なものと判断し、さらに、その問題を解決する能力が自分にはないと分かった潜在的被援助者は、援助を要請するかどうか、またするとしたら、誰に、どのような方法で要請するかを決定する。そして、この意思決定に、自己評価や自尊心が関係してくると思われるのである。

援助要請の決定を左右する重要な要因は、援助の要請、あるいは、非要請に伴うと予想される出費と利得である。援助要請の利得が、問題の解決といった援助の肯定的結果であるのに対して、その出費は、要請者が支払わねばならない犠牲や損失である。これには、経済的、物質的なものから、社会的、心理的なものまでが含まれる。この中で特に関係する重要なものが、後者の社会的、心理的出費であり、例えば、自尊心が低下すること、無能力感に苦しむこと、恥ずかしい思いをすること、他者から低く評価されたり、拒絶、無視されたりすることである。潜在的被援助者は、これらの出費ができるだけ少ない人に対して、またそのような方法で援助を要請することを決定するだろう。例えば、相手が社会的比較の対象となって、援助を要請する自分の劣等性が鮮明になるようなことのない相手に対して、また、直接的に、あるいは、間接的に援助を要請するのではなく、援助の必要性を潜在的援助者に自発的に気づかせ、援助を申し出てくれるように、さらに、援助の原因を外的に帰属して、この人には責任がないのだと相手に思わせて、援助を要請するだろう。

Fisher & Nadler (1976) や Fisher et al. (1983) は、被援助者の心理過程を「自尊心への脅威」(threat to self-esteem) の観点から分析している(図2参照)。彼らは、援助状況が、自己に関連した肯定的な要素と否定的な要素との両方を持っており、被援助が自らにとって支持的なものになるか脅威的なものになるかは、状況の特性と被援助者の特徴とによらず、次の

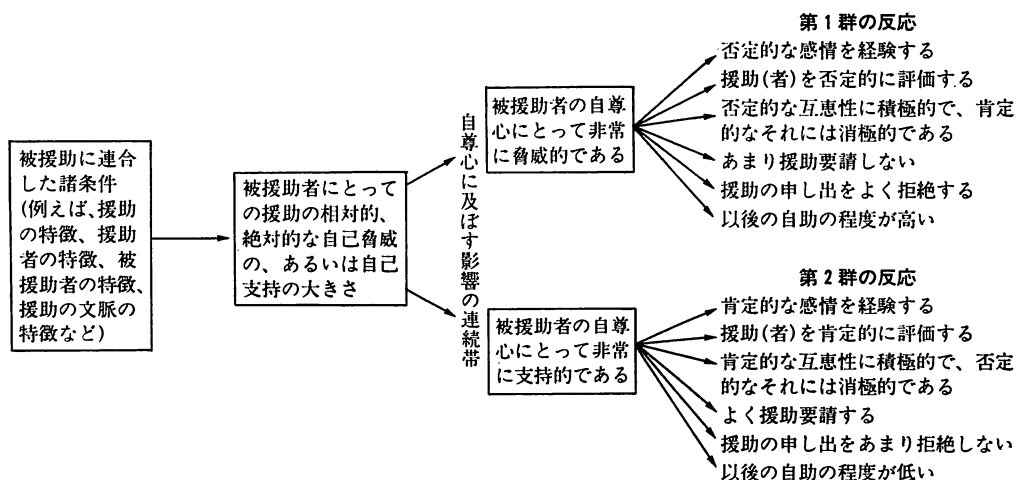


図2 被援助者の援助（者）に対する反応：自尊心への脅威モデル  
(Fisher, Nadler, & Whitcher-Alagna, 1983 より)

ように仮説している。すなわち、援助を要請したり、援助を受けたりすると、自尊心が傷つけられる恐れがある（援助が脅威的である）とき、人は、援助要請や被援助を躊躇したり、止めたり、拒否したりするだろう。それにもかかわらず、援助を受けた場合、図中の、第1群の否定的一防衛的反応が起こるだろう。例えば、被援助者は、援助者や援助自身を否定的に評価し、それらに否定的感情を抱くだろう。逆に、被援助が自尊心の維持、向上に寄与することが期待できる（援助が支持的である）とき、人は、積極的に援助を要請し、援助を受けるだろう。そして、第2群の肯定的一非防衛的反応が起こるだろう。すなわち、援助者や援助への肯定的評価や感情が起こるだろう。

援助は、一般に、社会的に好ましいことと考えられているが、それだからといって、それが自己にとって支持的であるとは必ずしも限らない。それは、援助一被援助関係が、援助者は優秀で、被援助者は劣等であることを暗示し易く、また、援助を受けることが自立していることの高い価値と葛藤するからである。そこで、どのような状況において、また、どのような人の場合、援助が被援助者にとって、脅威的になるのか、それとも、支持的になるのかが、以後研究されてきたのである。Fisher et al. (1983) は、第1群の否定的一防衛的反応と、第2群の肯定的一非防衛的反応を引き起こす状況の特性と、被援助者の特徴を表1のようにまとめている。

#### 4) 「自己の姿の呈示」の位相における自己と向社会的行動

注目され、把握された自己の姿は、種々の基準に従って評価され、その結果として自尊感情（自尊心）が経験されている。この焦点を当てられ、理解され、評価された自己の姿は、最後の位相において、他者への行動を通じて、他者の目に曝されることになる。自己の姿についての情報を他者に示したり、他者の目に曝された自己の姿を自らの意志で管理し、操作しようとする過程で、向社会的行動が促進されたり、抑制されたりすることが予想される。

##### (1) 援助における自己呈示の機能

Baumeister (1982) は、その論文の中で、愛他的行動における自己呈示の関心について検討している。そして、真に愛他的な行動は、自分自身の利得には無頓着で、他者の安寧への関心のみ動機づけられていると考えられるが、実際は、援助を要請している人の魅力性だとか、潜在的援助者の時間の切迫性のような他の要因によってしばしば影響されていると指摘している。

Satow (1975) は、自己呈示が援助に影響を及ぼすことを立証している。被験者が、公然の、あるいは、匿名の寄付を求められたところ、前者の寄付は、後者の寄付の平均7倍であった。このことは、愛他的な行動が、少なくともその一部分、慈悲深い、気前のよい人だと認識されたいとの願いによって動機づけられていることを暗示している。

Gottlieb & Carver (1980) は、傍観者効果を立証した多くの実験の手続きの特徴が匿名性にあることを指摘し、この匿名性を除去することによって、傍観者効果を非常に効果的に防いでみせた。Darley & Latané (1968) と同じように、物理的に隔離された未知の被験者がインターコムを通じて討議をしているときに、一人の被験者が発作を起こし、助けを求める。しかし、

表1 援助に伴って第1群（否定的—防衛的）反応，あるいは第2群（肯定的—非防衛的）  
反応を喚起する条件（Fisher et al., 1983）

第1群反応	第2群反応	研 究
恩恵者の属性と動機		Gergen & Gergen, 1974a
否定的*	肯定的*	
恩恵者と受益者との社会的比較の可能性		Fisher & Nadler, 1974
可 能*	不可能*	Nadler et al., 1976
返礼の可能性		Gross & Latané, 1974
不可能*	可 能*	
自主独立性への脅威		Gergen & Gergen, 1970, 1971
あ り*	ほとんどない*	
恩恵者の資源と専門性		Fisher & Nadler, 1976
高水準*	低水準*	
返済の義務感		Gergen et al., 1975
非常に強いか全くない	適 度	
自由の喪失		Brehm & Cole, 1966
伴 う	ほとんど伴わない	
提供された援助か要求された援助か		Gross et al., 1979
要求された援助*	提供された援助*	
援助課題の中心性		Morse, 1972
中心的課題	非中心的課題	
援助の自発性		Goranson & Berkowitz, 1966
非自発的	自発的	
援助の熟考性		Greenberg & Frisch, 1972
非熟考的	熟考的	
二面的援助か多面的援助か		Gergen & Gergen, 1974b
二面的	多面的	
規範による援助の指示		Tessler & Schwartz, 1972
弱 い	強 い	
援助による期待の非確証の方向		Morse & Gergen, 1971
否定的	肯定的	

\* この研究では，絶対的，あるいは相対的な自己脅威の程度が測定された。ここに挙げた全ての条件は，絶対的，あるいは相対的な自己脅威を生起させていたと考えられる。

Gottlieb らの研究では，さらに加えて，この隔離されている未知の被験者が，実験後に顔を合わせ，話をするだろうと，あるいは，未知のままでいるだろうと告げられた。そうすると，匿名のままでおれないときには，被験者が，一層頻繁に，また，素早く援助したのである。このことは，自己呈示的な関心が，傍観者の緊急事態への介入に寄与することを暗に示している。

Schwartz & Gottlieb (1976, 1980) は，傍観者が自己呈示のために緊急事態に介入するのは，そこにいる他の傍観者を喜ばせ，満足させようとするからであることを明らかにしている。彼らは，評価懸念が介入決定に影響するとし，この考えを支持するように，ある緊急事態でどの

ような行動を適切なものと他の人々が考えているかについての手掛かりが、援助行動に強い影響を与えることを証明した（1976）。さらに、傍観者が援助を不適切なものと考えているのではないかと思われる状況では、傍観者を喜ばせるための援助の抑制が予測されるが、匿名化によってそのような自己呈示の関心を除去すると、援助が促進されることも明らかにしている（1980）。これは、援助を通じて自己を呈示して自己を形成したいという願いが、援助を促進したと考えられる。

緊急事態への傍観者の介入の場合、聴衆を喜ばせたいという自己呈示の関心と、自己を形成したい（例えば、傷ついたり低下した自己を修復したり高めたい）という自己呈示の目標とは、必ずしも対立しない。なぜならば、Darley & Latané（1968）が、人々が緊急事態に遭遇するのは一般に稀であると指摘しているが、そのような極端に異常で、予想のつかない状況では、自己形成（self-construction）という自己呈示の長期的目標は機能しないであろうと考えられるからである。すなわち、緊急事態にある傍観者は、公的自己の形成との関わりにはあまり気づかず、それよりはむしろ、そこにいる他者の直接的な、短期的要求や期待を意識し易いだろう。しかし、人の頼みを聞き入れるような援助は一般的なことであるから、このような場合には、緊急事態への介入のときよりも、自己形成の関心が、一層関係してくるであろう。

Steele（1975）は、主婦に電話して、恩恵の提供を要請した。いくらかの主婦は、この要請に先立って、別の人物から電話を受け、この町におけるあなたの評判はよくないと告げられていた。その結果、彼女たちの要請への応諾は、悪評を告げられなかった主婦のそれよりも、増加したのである。お世辞は、昔から、承諾を勝ち取る最も有効な手段であると考えられてきたが、この研究の被験者は、自己の公的イメージが悪いことを知った後に、一層応諾を示したのである。愛他的行為によって、公的イメージが元に戻ったかどうかを確かめる操作を欠いているけれども、この結果は、自己呈示の観点から解釈できるだろう。すなわち、彼女たちは、自分の公的なイメージが傷つけられたために、社会的に望ましい行為を公的に行うことによって、それを修復しようと動機づけられたのであろう。なお、ここで修復されたイメージは、ある特定の聴衆が抱いているイメージではなく、その個人の一般化された公的イメージである。したがって、愛他的行動は、一般に、自己形成としての自己呈示の関心に一層関係しているだろう。

気前の良さは、被験者にお金の分配をさせることによって研究されてきた。そして、被験者がそれを公的に行うか、それとも、私的に行うかによって、分配の異なることが明らかにされた。

例えば、Reis & Gruen（1976）は、被験者が、誰か別の人がそれを知るのではないかということだけでなく、誰が知るかによっても、分配を変えることを立証している。課題遂行後、被験者は、自分たちの集団に対して異なる程度の貢献をした成員にお金を分配するよう求められた。そして、分配を実験者に報告しなければならないと告げられた場合、その分配は、衡平規範（貢献に比例した支払い）に従った。しかし、分配を他の被験者に報告しなければならないと告

げられた場合、その分配は、平等規範（貢献の程度にかかわらず、全員に平等に支払う）に従った。さらに、分配は誰にも知らせず秘密にされると告げられた場合、被験者が自分に分配する量は、自分の貢献に比例せず、多くなる傾向があった。この結果は、分配を通じての自己呈示が、相手に喜んでもらいたいという関心からなされたことを示している。

Paulhus et al. (1977) は、被験者に、献血者にはどんな利得があるかを記述した、あるいは、献血者がいかに慈悲深く、人道主義的であるかを記したパンフレットを与えた。そして、もう一度献血しますかと彼らに質問したところ、後者のパンフレットをもらった被験者が、前者の被験者よりも、一層強い献血意図を示した。この結果は、自己呈示の観点から説明することもできる。すなわち、人は、自分の利得のためよりも、他の人々が自分のことを善良な人であると思ってくれるように、献血するというのである。

## (2) 被援助における自己呈示の機能

自己呈示は、被援助にとっても重要である。援助者は、自分が善良で愛他的であると思われることを願うが、被援助者は、自分が依存的で無能力であると思われることを避けたいと願うものである。したがって、例えば、援助を受けて当然であると主張することによって、被援助者は、自分が無力、無能ではなく、また、他人の施しに頼って暮らしているのでもなく、合法的に自分のものを受け取っているだけであることをほめめかすのである。

Tessler & Schwartz (1972) は、自分の面目が保てるような、すなわち、失敗が外的な原因に起因することが明かな状況においては、そうでない状況においてよりも、被験者が援助を一層進んで要請することを証明している。要請者の関心が私的なものか、それとも公的なものかは、そのための手続きを含まないこの研究では区別できないが、この結果は、いずれにしても、自己呈示の問題と関係している。

Gouldner (1960) は、受けた援助に対して返報することを指示する「互惠性規範」(reciprocity norm) の存在を提案しているが、この規範の働きの中にも自己呈示の問題が含まれている。例えば、援助者にお返しができないときよりも、それができるときに、被援助者は、援助者に一層魅力を感じた (Gross & Latané, 1974)。では、なぜこの返済の可能性が、被援助を快いものにするのだろうか。それは、かつての援助者に恩恵を施すことが、自分はいつも人に依存する、無能力者でないことを示す申し分のない公の証拠になるからである。

ところで、被援助は、厄介な自己呈示の問題を提起している。それは、被援助が、自己呈示の長期の目標と短期の目標の葛藤を必ず伴うというものである。すなわち、長期の、自己形成の目標が優勢である場合、被援助者は、自分が無力、無能でなく、依存的でもないことを示そうとするだろう。ところが、被援助者は自分が無力、無能で、依存的であることを示すほど、援助され易いのであり、そこで両者が葛藤することになるのである。研究は、前者の動機が一層重要であることを明らかにしており、このことは、自己呈示による自己形成の関心が、実際に被援助の心理に関係していることの証拠となる。



以上、援助と被援助が自己呈示といかに関係するかを見てきた。援助は、確かに、内密に、匿名で行われることがある。したがって、良い印象を得たいとか、与えたいという関心以外の動機が、そのような場合、働いているだろう。しかし、我々は、自己呈示の関心を無視すべきでない。事実、人がこれらの関心を持つことによって、援助は、起こり易いし、また、受け入れられ易いだろう。

#### 4. おわりに：「自己」概念への注目と今後の向社会的行動研究

向社会的行動の生起を促進する、あるいは、抑制する要因は、従来からの研究によって、かなり明らかにされてきた。そして、それらの中には、「自己」に関するものもあった。なぜ向社会的行動が起こるのか、あるいは、起こらないのかを考察していくと、それは、自己の問題と関連してくることが多い。にもかかわらず、「自己」概念を中心に、向社会的行動の生起・非生起を検討した研究は少ない。

この論文は、向社会的行動の生起、あるいは非生起を、自己、特に「自己過程」の観点から検討し、自己と向社会的行動との間の因果関係を整理した。詳細な論究によって、自己過程の4つの位相のそれぞれにおいて、自己が向社会的行動を種々の仕方で規定することが明らかとなった。さらに従来の研究で、例えば、状況要因の働きとして説明されていたものが、考察を進めると、その根底に自己の関わりが推察されるものもあった。むしろ、自己の観点からの説明の方が理解し易いと考えられるものさえあった。

我々は、向社会的行動に関するこれまでの研究を「自己」の観点から捉えなおし、その視点から、研究の発展を試みて、向社会的行動の一層の理解を図るべきであろう。なぜならば、そのことが、向社会的行動を含めた対人行動の理解に必ずや寄与すると期待できるからである。

#### 参 考 文 献

- 相川 充 (1989) 援助行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (共編) 社会心理学パースペクティブ1 個人から他者へ 誠信書房 291-311.
- Batson, C. D., Coke, J. S., Jasnoski, M. L., & Hanson, M. (1978) Buying kindness: Effect of an extrinsic incentive for helping on perceived altruism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 86-91.
- Baumeister, R. F. (1982) A self presentational view of social phenomena. *Psychological Bulletin*, 91, 3-26.
- Buss, A. H. (1980) *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco, Freeman.
- Cozby, P. C. (1973) Self-disclosure. *Psychological Bulletin*, 79, 73-89.
- Darley, J. M., & Latané, B. (1968) Bystander intervention in emergencies: Diffusion of responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 377-383.
- Duval, S., Duval, V. H., & Neely, R. (1979) Self-focus, felt responsibility, and helping behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1769-1778.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. (1972) *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic

Press.

- Fisher, J. D., & Nadler, A. (1976) Effects of donor resources on recipient self-esteem and self-help. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 139-150.
- Fisher, J. D., Nadler, A., & Whitcher-Alagna, S. (1983) Four theoretical approaches for conceptualizing reactions to aid. In J. D. Fisher et al. (Eds.) *New directions in helping*. (Vol. 1) *Recipient reactions to aid*. New York: Academic Press. 51-84.
- Freedman, J. L., & Fraser, S. C. (1966) Compliance without pressure: The foot-in-the-door technique. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 195-202.
- French, J. R. P., Jr., & Raven, B. (1959) The bases of social power. In D. Cartwright (Ed.) *Studies in social power*. Ann Arbor, Mich.: Institute for Social Research. 150-167.
- Gergen, K. J. (1971) *The concept of self*. New York: Holt.
- Gibbons, F. X., & Wicklund, R. A. (1982) Self-focused and helping behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 462-474.
- Gottlieb, J., & Carver, C. (1980) Anticipation of future interaction and the bystander effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, 16, 253-260.
- Gouldner, A. (1960) The norm of reciprocity: A preliminary statement. *American Sociological Review*, 25, 161-178.
- Gross, A., & Latané, B. (1974) Receiving help, reciprocation, and interpersonal attraction. *Journal of Applied Social Psychology*, 4, 220-223.
- Haan, N. (1977) *Coping and defending: Processes of self-environment organization*. New York: Academic Press.
- Hoffman, M. L. (1976) Empathy, role taking, guilt, and development of altruism motives. In T. Lickona (Ed.) *Moral development and behavior*. New York: Holt. 124-143.
- Kelman H. C. (1961) Processes of opinion change. *Public Opinion Quarterly*, 25, 57-78.
- Kohlberg, L. (1976) Moral stages and moralization. In T. Lickona (Ed.) *Moral development and behavior*. New York: Holt. 31-53.
- Latané, B., & Darley, J. M. (1968) *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Appleton.
- Loevinger, J. (1966) The meaning and measurement of ego development. *American Psychologist*, 21, 195-206.
- Miller, R. L., Brickman, P., & Bolen, D. (1975) Attribution versus persuasion as a means of modifying behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 430-441.
- 中村陽吉 (1983) 実験社会心理学における自己 日本グループダイナミクス学会31回大会発表論文集 S-1.
- 中村陽吉 (1988) 「援助行動」における「自己」の機能: 促進的機能と抑制的機能 学習院大学文学部研究年報 第35輯 175-193.
- 中村陽吉 (1990) 「自己過程」の4段階 中村陽吉 (編) 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 3-20.
- Paulhus, D. L., Shaffer, D. R., & Downing, L. L. (1977) Effects of making blood donor motives salient upon donor retention. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 99-102.
- Piaget, J. (1963) *The origins intelligence in children*. New York: Norton.
- Reis, H., & Gruzen, J. (1976) On mediating equity, equality, and self-interest: The role of self-presentation in social exchange. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 487-503.
- Satow, K. (1975) Social approval and helping. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 501-509.

- Schwartz, S., & Gottlieb, A. (1976) Bystander reactions to a violent theft: Crime in Jerusalem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 1188-1199.
- Schwartz, S., & Gottlieb, A. (1980) Bystander anonymity and reactions to emergencies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 418-430.
- Simner, M. L. (1971) Newborn's response to the cry of another infant. *Developmental Psychology*, **5**, 136-150.
- Snyder, M., & Cunningham, M. R. (1975) To comply or not to comply: Testing the self-perception explanation of the "foot-in-the-door" phenomenon. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 64-67.
- Snyder, M., & Swann, W. B., Jr. (1978) Behavioral confirmation in social interaction: From social perception to social reality. *Journal of Experimental Social Psychology*, **14**, 148-162.
- Steele, C. M. (1975) Name-calling and compliance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 361-369.
- Stotland, E. (1969) Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. (Vol. 4) New York: Academic Press. 271-314.
- 高木 修 (1989) 地域社会内対人行動としての援助の心理 安藤延男 (編) コミュニティの再生 現代のエスプリ 269号 至文堂 36-54.
- Tesser, A. (1988) Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. (Vol. 21) New York: Academic Press. 181-227.
- Tessler, R., & Schwartz, S. (1972) Help-seeking, self-esteem, and achievement motivation: An attributional analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **21**, 318-326.
- Wegner, D. M. (1975) *The development of morality*. Homewood, Ill.: Learning Systems.
- Wegner, D. M. (1980) The self in prosocial action. In D. M. Wegner, & R. R. Vallacher (Eds.) *The self in social psychology*. New York: Oxford University Press. 131-157.
- Wegner, D. M., & Schaefer, D. (1978) The concentration of responsibility: An objective self awareness analysis of group size effects in helping situations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 147-155.
- 山口裕幸 (1988) 成功・失敗経験による注意の方向性の違いが援助行動生起に及ぼす効果 実験社会心理学研究 27巻 113-120.